

『平家正節』所載の名乗のアクセント再論

上野和昭

はじめに

「清盛・頼朝・義経」など漢字2字から成り4拍（2拍+2拍）に訓む男性の名（名乗）の京都アクセントについては、はやく榎垣実（1946:120）が、現代「男の名には、平板型と頭高型との二種がある」とし、平板型の例にマサシゲ、ヨリトモ、マサカズを、頭高型の例にヨシイエ、タカノリ、イエヤスをそれぞれあげて、「この二つの型が最も多いが、どんな場合に平板型になり、どんな場合に頭高型になるかは、結局よく分からない。非常に複雑なのだ」と述べている⁽¹⁾。また、若年層の変化については、中井幸比古（2001:9）が「4拍の姓・名（名には歴史上の人物のもの多し）には、老1若L2のものがかなり目立つ。名では老0若L2（信彦、信広……）、老1，0若L2（典明、範正……）も目立つ」という指摘をしている。

中井のいう若年層の変化はともかくとして、榎垣がいうように、現代京都高年層の4拍（2拍+2拍）に訓む男性の名乗はHHHH型（平板型）またはHLLL型（頭高型）に発音されるが、本稿では、これらが溯った時代にどうであったのか、それがどのようにして現代の様相になったのかを考察し、そこに『（平家）正節』所載の名乗に付けられた譜記を解釈して位置付けてみたい。

このことについては、すでに秋永一枝（1980:323-340）が「古今和歌集声点本」にあらわれる名乗に差された声点を研究して、アクセント構成上のおよその傾向を明らかにし、さらに現代にいたるまでの変遷のさまを推定している。また、そこに中近世のアクセント資料として用いられた『正節』の諸例についても、中村萬里（1986）が整理して示しており、奥村三雄（1986・1993）もそのアクセント変化についてたびたび言及してきた。加えて筆者自身（上野和昭1988）も、かつてこの問題を論じたことがある。

いま再び『正節』所載の名乗のアクセントを取り上げるのは、『白声・口説』という音楽性が皆無または希薄な曲節だけを対象にして、その譜記に反映する名乗のアクセントを検討した結果、秋永の変遷図をいくぶんなりと補足できるかと考えたからであり、またここに述べる見解をもって旧稿で論じた筆者の解釈を訂正したいと思うからである。

ところで、『正節』所載の名乗のアクセントについては、普通名詞などにみられるものとはや

や異なる様相が指摘できる。すなわち京都アクセントの変化の一般的な傾向として、HLLL型はHLLL型と「型の統合」を起こして、ともにHLLL型にまとまる、ということが言われる。また、『正節』の《白声》には施譜当時（近世中期）の京都アクセントと対応する譜記が施されており、《口説》の譜記にはそれよりも以前の様相が反映しているともされている。これらのことと、名乗のアクセントに《口説》HLLL型：《白声》HHLL型という対立傾向がみられることは、一見するところまったく整合しない。まして現代京都でこれらが多くHLLL型になっていることを思うと、この謎はますます深まる。ここに想定される変化は《口説》HLLL⇒《白声》HHLL⇒現代HLLLとなるが、このような変化はふつうには理解しがたいものだからである。

この問題について、奥村（1986:364）は、とくに現代京都には触れずにHLLL⇒HHLLを「語頭下降調回避現象」と位置付けて、《白声》のHHLL型を新しい型と認定した。それに対して筆者は旧稿（1988:16-17）で、《白声》の施譜者が、よく京都アクセントを知らない名乗にも、一律にHHLL型に対応する譜記を付けたのではないか、という趣旨のことを述べた。普通名詞ならぬ固有名詞、それも類型化しやすい漢字2字4拍の名乗ならば、そのような可能性もあろうかと思ったのである。しかし、いま考え直してみると、奥村（1993:41-45）の筆者に対する反論には従うべきところもあり、とくに「《平家正節における白声部分のハカセのみを、前田流平曲の伝承とは無関係のものに見なし、口説の部分のそれと峻別する》考え方には、にわかに従い難い」とする批判はたしかに拙稿の弱点を衝いている。

奥村（1993:38-45）の主張は、次のようにまとめられようか。①4拍の名乗にみられるHHHL（白声以外の曲節）⇒HHLL（白声）の変化は「近世中期頃以前（平家正節成立期以前）」にあった（奥村1990:668も同様）。②HHHL⇒HHLLは「語末下降調回避現象」として一般化できるものである（同:665-667）。③HLLL（口説）⇒HHLL（白声）の変化は「語頭下降調回避現象」として一般化できるもので不自然なものではない（同:645-646）。④《白声》と《口説》との区別は、前田流平曲ではかならずしもはっきりしたものではなかった。⑤のちにHHHHとHLLLとにおさまるのは「基本型化」として捉えられる（同:669）。

これに対して、筆者の考えは次のようである。①は旧稿においても賛成している。②については「型の統合」として③の変化とまとめて考える立場をとるが、この変化を一般化してとらえようとするところには同調する。③については考え方を異にするが、すでに上野（1995:10）に述べたことがあるので繰り返さない。④『正節』以前の前田流諸譜本において《白声》と《口説》との区別がはっきりしないからといって、正節系諸本における施譜の経緯まで規定しうるかどうかは別の問題だと考える。⑤には賛成する。このように考えれば、近世以来HLLL⇒HHLL⇒HLLLなどという無理な想定をしなくともすむ。ただしHHLL⇒HLLLという「型の統合」（昇核現象）と言われることも）があって「基本型化」が進んだものとする。

1. 名乗の同定と前・後部成素のアクセント

1.1 『正節』にあらわれる名乗には異なる漢字表記をしたものがある。たとえば五條大納言「邦綱」（新都沙汰・洲旣合戦）は「国綱」（御産巻）とも書かれるが、これは和語としてそれぞれの構成成素「くに」と「つな」に違いはないから、ここでは同じものとして扱うことにする。比企藤四郎「能員」（征夷將軍院宣）は「義員」（大臣殿誅罰）とも、信西の子息「成範」（我身栄花・小督）は「重教」（厳島御幸）とも、同じく「長教」（厳島御幸）は「修範」（法住寺合戦）とも、安田三郎「義定」（富士川）は「義貞」（河原合戦）とも書かれているが、これらもそれぞれ同じに扱う。信太の三郎先生「義憲」（源氏掬）については、「義教」（判官都落）と表記されていても同様に扱うべきであろうが、讃岐の七郎「義範」（六箇度合戦）の場合も、和語としての構成上は「義憲・義教」と同じである（「のり」はいずれの表記でも「則・法」の意味で《早稲田語類》第二類と考えられる）から別人のこととはいえ、ここでは一つに扱うことにする。同じく「重能」も阿波民部（先帝御入水・壇浦合戦など）、畠山庄司（聖主臨幸・篠原合戦など）、中原康定の弟（征夷將軍院宣）の三者の名乗としてあらわれるが、同一人を指すかどうかはいま問題にしない。なお阿波民部「重能」には「成能」（経之嶋・大坂越）という表記もあらわれる。同様なことは、福井の庄の下司「友方」（奈良炎上）と三條の大納言「朝方」（法住寺合戦）にも言える。

ここでは名乗の構成成素が和語として同じであるならば、漢字表記やその指す人物は問題にしないで一つに扱う、という方針で用例を処理することとするが、一つ問題となるのは大納言資賢の孫に少将「雅賢」（法住寺合戦）という人がいて、これが「雅方」（大臣流罪）とも書かれていることである。後部成素の「かた（方）」は《早稲田語類》第二類で古来 HL 型、一方「かた（賢）」は漢字「賢」に「かたい（堅）」の意味があるから、その形容詞（第一類）語幹で HH と考えられる。したがって、「方」と「賢」とは訓みは同じであっても、アクセントの構成にまで溯って考えるときは、それぞれ別に扱うべきものとする。

1.2 つぎに、名乗の構成成素のアクセントについて説明する。

名乗の構成成素が、2 拍名詞と等しい場合には、《早稲田語類》に照らしてその類別から、古くどのようなアクセント型をとったかを確定する。《早稲田語類》にないものは『日本語アクセント史総合資料』（索引篇）に載る資料からアクセント型を推定した。2 拍動詞は、それが連用形相当の形ならば高起式 HL、低起式 LF と推定する。基本形相当の場合も同様に扱う。2 拍形容詞も LF とする。ただし、動詞語幹・形容詞語幹は、高起式ならば HH、低起式ならば LL とみる。たとえば「さだ（定・貞）」は「さだむ」LLF の語幹であろうから LL、「とほ（遠）」は「とほし」HHF の語幹であろうから HH と推定するがごときである。このようにして推定された各成素を一覧すると以下のようになり、ほぼ秋永（1980:324/334-335/337）の推定に一致する。

動詞連用形相当の形の場合は、転成名詞形であるとも考えられるが、ひとまず連用形のアクセント型で分析する。(なお、以下に w とあるのは《早稲田語類》を、V・A はそれぞれ動詞・形容詞をあらわす)

1.2.1 古く HH と推定される成素

きん (公=きみ君 w1)、くに (国・邦 w1)、これ (惟=是 w1)、さと (郷・里 w1)、すゑ (季=末 w1)、とも (朝・知=友 w1△×)、ふぢ (藤 w1)、みち (道 w1) ←以上《早稲田語類》第一類名詞として所載の語／あつ (敦=厚・篤 wA1)、かた (賢=堅 wA1)、とほ (遠 wA1) ←以上《早稲田語類》第一類形容詞として所載の語 (語幹)

1.2.2 古く HL と推定される成素

うち (氏 w2×)、かた (方 w2)、ため (為 w2)、のり (教・憲・範=法・則 w2)、ひと (人 w2×)、ふん (=ふみ文 w2)、むら (村 w2) ←以上《早稲田語類》第二類名詞として所載の語／あき (顕=明 wV1)、すけ (助 wV1)、つぎ (嗣 wV1)、もり (盛 wV1)、ゆき (行 wV1)、より (頼=抛・寄 wV1) ←以上《早稲田語類》第一類動詞として所載の語 (連用形)／ひで (秀) ←「ひづ (秀)」〈上平濁〉(観本名義 法下 9 オ 3) より推定

1.2.3 古く LL と推定される成素

いへ (家 w3)、さね (実 w3×)、つな (綱 w3)、とき (時 w3)、ふさ (房 w3)、もと (基=本・元 w3) ←以上《早稲田語類》第三類名詞として所載の語／さだ (定・貞 wV2)、なほ (直 wV2) ←以上《早稲田語類》第二類動詞として所載の語 (語幹)／きよ (清 wA2)、しげ (重・成=繁 wA2)、たか (高 wA2)、たけ (武=猛 wA2)、ただ (忠=正 wA2)、ちか (親=近 wA2)、なが (長・修 wA2)、ひさ (久 wA2)、ひろ (広 wA2)、まさ (正 wA2#)、やす (康=安 wA2) ←以上《早稲田語類》第二類形容詞として所載の語 (語幹)

1.2.4 古く LH と推定される成素

なか (仲=中 w4)、かず (員=数 w4)、たね (種 w4)、なに (何 w4) ←以上《早稲田語類》第四類名詞として所載の語

1.2.5 古く LF と推定される成素

かげ (景=影・蔭 w5)、つね (経=常・恒 w5)、はる (春 w5) ←以上《早稲田語類》第五類名詞として所載の語／あり (有 wV2)、かね (兼 wV2)、すみ (純・澄 wV2)、なり (成 wV2)、はれ (晴 wV2)、もち (茂=持 wV2)⁽²⁾、もり (守 wV2#) ←以上《早稲田語類》第二類動詞として所載の語 (連用形)／かぬ (兼 wV2)、たふ (任=堪 wV2)、のぶ (信=延 wV2)、みつ (光=満 wV2) ←以上、同 (基本形)／よし (義・能=良 wA2)、とし (俊=利・疾 wA2) ←以上《早稲田語類》第二類形容詞として所載の語

1.2.6 その他

つら (連) ←これを前部成素とする『日本語アクセント史総合資料』(索引篇) に所載の語か

らHXと推定/むね(宗)←『正節』の「宗と(上上×)」5下判官22-4素声などからHHと推定/もろ(師=諸)←これを前部成素とする『日本語アクセント史総合資料』(索引篇)に所載の語からHXと推定(秋永1980:337参照)/ひら(衡=平)不明(同:334ではHL?とする)

2. 『正節』における名乗のアクセントの概観

2.1 まず『正節』所載の「名乗」が、どのようなアクセント型にどれほどの数だけ分布しているのかを概観する。ここで扱う名乗の語数(異なり語数)は303語、また例数(延べ語数)は1,142例である。以下【表】を参照。

2.1.1 《白声》の曲節にあらわれる「名乗」は全部で167語(型の重複を除いた数)である。そのうちHHHH型は12語、HHHL型は1語、HHLL型は127語、HLLL型は34語で、その他(LLHH型)が1語である³⁾。これらの間にはアクセント型相互の重複があって、HHLL型に属するもののうちの8語はそれぞれほかの型としてもあらわれる。型別にみればHHLL型が断然多い。対して《口説》の曲節にあらわれるものは全部で238語(型の重複を除いた数)であるが、

【表】『正節』《白声・口説》所載の名乗のアクセント型と語数・例数(括弧内は型の重複を除いた数)

		HHHH	HHHL	HHLL	HLLL	その他	計
白声	語数	12	1	127	34	1	175(167)
	前部高起式	12	1	52	2	0	(65)
	前部低起式	0	0	75	32	1	(102)
	型の重複	1	1	8	6	0	
	例数	26	1	268	60	1	356

口説	語数	17	7	105	110	0	239(238)
	前部高起式	17	7	38	9	0	(70)
	前部低起式	0	0	67	101	0	(168)
	型の重複	1	0	1	0	0	
	例数	31	94	345	316	0	786

白声・口説	語数	24	7	186	121	1	339(303)
	前部高起式	24	7	72	11	0	(100)
	前部低起式	0	0	114	110	1	(203)
	型の重複	5	7	36	24	0	
	例数	57	95	613	376	1	1,142

型相互の重複は HHHH 型と HHLL 型との間に 1 語あるのみ。型別にみると HHHH 型は 17 語、HHHL 型は 7 語であり、HHLL 型と HLLL 型とはそれぞれ 105 語と 110 語で拮抗している点、《白声》の場合とは大きく様相を異にする。

《白声・口説》両曲節をあわせてみると（当然両曲節に同じ型であられる名乗は、そのアクセント型に属す語数としては一つに数えられることになる）、HHLL 型と HLLL 型との違いはさほど明確でなくなるが、曲節によって様相が異なることは上述のとおりである。型別にみると、HHHH 型は 24 語あり、そのうちの 5 語についてはいずれかの曲節で HHLL 型でもあられる。HHHL 型の 7 語は《口説》だけをみると型の重複もないが、《白声》ではそれらのすべてに HHLL 型と対応する譜記が施されている。また HHLL 型と HLLL 型の両型に対応する譜記のある語は両曲節を通して 24 語であるが、《白声》HHLL 型：《口説》HLLL 型という対立をみせる語は 18 語、《白声》のなかで同じ名乗に両型があられるものが 6 語ある。《口説》においては、そのような型の重複はない。

2.1.2 つぎに、それぞれの型別に検討を加える。まず HHHH 型については問題が多く、ここでは疑問なものも含めて数えていることを断らなければならない。《白声》の 12 語 26 例についてみても、明らかな HHHH 型と、そのように推定したものが混在する。すなわち下記第一例のごときはアクセント型を HHHH 型と確定できる。しかし第二例のように助詞「の」接続形しかあらわれないものについては、実際には HHHL 型の可能性を否定することはできないけれども、一応ここに含めた。

公朝急ぎ鎌倉へ下る（上上上上上××～） 13 下法住 63-1 素声

輔仁^トの親王と（上上上上上×××××） 10 上若宮 27-3 白声

このほかにも「資行」と「判官」とが連なって「資行判官」となった場合に、《口説》で単独形 HHLL 型もとる「資行」が HHHH のようにあられる（白 3 口 1）のは、あるいは連接型として全体のまとまりを優先した音調とみるべきかもしれない。

資行は（上コ×××） 9 上阿古 2-3 口説

資行判官が（上上上上上×上××××） 9 上文流 6-1 素声

この点では《口説》17 語 31 例も事情は同様であって、確定的なものは「季貞・宗実」くらいしかない。そしてさらに《口説》には、いわゆる「特殊低起式表記」の問題が加わる。たとえば以下の例がそれであるが、いずれも「特殊低起式表記」の類型⁽⁴⁾に合致する譜記であるから、ことばの音調としては、それぞれに句頭から高平調となるものと考えられるので、単独形では HHHH 型と認定してよいものと思われる。

為義斬られ（××上上コ××） 4 上二后 2-2 口説

憲貞^リに仰せて（××××上コ×××） 10 上臣流 25-5 口説

以上から『正節』所載の HHHH 型の「名乗」を曲節別にすべて掲げれば以下のようなようである

(括弧内は疑問の残るもの)。このうち、《白声・口説》それぞれの曲節内において「行隆」と「資行」だけが HHLL 型にもあらわれる。

《白声》公朝、行隆、行綱、頼朝、頼政 (国綱、惟高、惟仁、資賢、輔仁、資行、朝方)

《口説》季貞、季重、為義、憲貞、宗実、宗通、師高、頼兼、頼綱、頼朝、頼政 (国綱、資賢、資方、資行、師家、頼資)

2.1.3 《白声》の HHHL 型は以下の例があるのみだが、これも京大本の朱注記および尾崎本の譜記にあるような HHLL 型と対応する譜記に従うべきものであろう。

知盛の (上上上××) 10下壇浦 7-1 白声

[早 (同)、京 (上上上××) 第三譜に朱「野无」墨「非」、尾 (上上×××)]

《口説》の HHHL 型には「惟盛、惟義、知教、知盛、教盛、宗盛、頼盛」の 7 語があり、それぞれが《白声》では HHLL 型の譜記をともなっている。

2.1.4 また《白声》においては HHLL 型が他を引き離して断然優勢である。全167語のうち型が重複するものを含めて127語がこの型であられる。これは全体の 7 割以上である。

《白声》HHLL 型

有国、家衡、家房、景清、景時、景正、兼綱、兼雅、清国、清親、清房、清盛、公長、公茂、惟村、惟盛、惟義、貞任、貞光、貞盛、実平、実光、実基、実盛、実康、重資、重房、重藤、重盛、重能 (成能)、資高、祐経、資時、助長、資盛、季貞、季重、季範、季康、季頼、高家、高直、武久、武衡、忠景、忠親、忠綱、忠信、忠度、忠盛、種直、為清、為俊、為成、為久、親家、親清、親能、嗣信、経遠、経房、経政、時忠、時成、朝親、朝綱、知時、友信、知教、知盛、朝泰、長方、仲綱、仲成、仲頼、直家、直実、成経、信隆、信成、信基、信康、信行、憲方、則綱、教盛、教能、範頼、秀郷、秀衡、広綱、将門、通資、通盛、光長、光房、光盛、光能、宗清、宗高、宗任、宗信、宗盛、宗康、基宗、盛国、守重、盛澄、盛統、盛俊、盛教、康国、康定、泰定、泰経、康頼、行家、行隆、義綱、義経、義朝、義仲、義教 (義憲・義範)、義盛、頼方、頼春、頼盛 以上127語 (下線は同じ《白声》ではほかの型にもあらわれるもの。以下同様)

《白声》ではほかの型と重複するもの 8 語については、HHHH 型にもあらわれる「行隆」、HHHL 型にもあらわれる「知盛」を除けば、残る 6 語は HLLL 型にもあらわれるもので「実基 (1/2)、重能 (成能 1/5)、種直 (1/3)、時忠 (3/5)、仲頼 (1/2)、信隆 (1/5)」がそれぞれ (数字は、《白声》においてそれぞれの語の施譜された全例数に対する、HLLL 型に対応する譜記を施された例数)。次項に述べるように《白声》で HLLL 型だけをとる名乗が 28 語もあり、これら HLLL 型と対応する譜記を疑う必要はないようであるが、ただ「実基」の 1 例については下記のように HHLL 型に相当する譜記をもつ正節系譜本がある。

実基トを (上××××) 1下那須 4-4 白声 [尾早 (同)、京A芸 (上上×××)]

《口説》では105語がこの型に数えられ、他の型と重複して施譜されているものはHHHH型との間で「資行」ただ一つあるのみである。

《口説》HHLL型

敦盛、有綱、有教、有盛、景清、景広、兼雅、兼光、兼盛、清家、清宗、清盛、伊長、定長、貞盛、実基、実盛、重藤、重盛、助氏、資澄、資時、助長、資成、助茂、資盛、資行、季成、季通、高綱、忠清、忠綱、忠光、忠宗、忠盛、親家、親清、親業、親宗、経俊、経政、経宗、経盛、時政、友方（朝方）、朝綱、知時、朝泰、仲家、長方、仲綱、修範（長教）、仲光、長盛、直実、成氏、成景、成澄、成綱、成経、業盛、信盛、教経、教光、教能、範頼、秀国、秀郷、広綱、正綱、通盛、光隆、光長、光直、光能、宗清、宗任、宗信、宗光、宗茂、宗康、盛国、盛澄、守澄、盛統、盛俊、盛長、守教、師純、師直、師盛、泰定、泰親、泰経、康頼、義員（能員）、義経、能遠、義朝、義仲、義成、義教（義憲・義範）、良道、義盛、頼業 以上105語

2.1.5 HLLL型は《白声》に34語、《口説》に110語が数えられるが、《白声》の34語のうち6語は前項に述べたようにHHLL型にも施譜されており、《口説》110語にはそのようなものはない。

《白声》HLLL型

家貞、景季、兼遠、兼平、定房、貞能、実基、重兼、重衡、重能（成能）、季仲、隆房、武里、忠文、種直、為房、時実、時忠、時晴、仲国、仲頼、成忠、成親、信隆、信連、信俊、信頼、広嗣、元方、基房、義兼、義定（義貞）、義久、義基 以上34語

《口説》HLLL型

顕季、顕頼、家貞、家忠、家長、家成、家光、景家、景季、景高、景親、景経、景時、景久、兼遠、兼平、兼康、清定、清房、定高、貞任、定成、貞能、実家、実平、重景、重兼、重国、重貞、重忠、重親、重俊、重直、成範（重教）、重秀、重衡、重房、重行、重能、高家、隆季、高直、隆房、武里、忠純、忠親、忠成、忠信、忠度、忠房、忠文、忠康、忠頼、種直、為員、為久、親忠、親俊、親雅、親能、嗣信、経遠、経房、時家、時員、時実、時忠、時光、時頼、俊通、仲兼、仲国、仲信、仲政、成忠、成親、信隆、信綱、信連、信俊、信成、信房、信基、晴信、秀遠、秀義、広嗣、雅賢、雅方、将門、光広、茂遠、以仁、茂頼、基兼、基親、基房、基道、基康、盛定、盛遠、義賢、義清、義定、義重、義高、義連、義平、義康、能行 以上110語

2.2 以上、曲節別にアクセント型を検討したが、ここにいくつかの問題点を指摘できる。

2.2.1 第一は《口説》にのみHHHL型があり、それらは《白声》では例外なくHHLL型をとるということである。ただしHHHL型をとる語例は『正節』にあらわれる303語の「名乗」のうち、わずかに7語しかない。

2.2.2 つぎに《白声》ではHHLL型が優勢であり（127語）、HLLL型はその四分の一程度

(34語) しかなく、しかもその両型が一つの語にあらわれることもある(6語)ということが指摘できる。これらのことは、HHLL型とHLLL型との間に時間的前後関係を思わせる。しかし、この状況だけからは、HHLL型からHLLL型への変化が始まったところとみるべきか、逆にHLLL型からHHLL型への変化が進行して大勢が決した段階とみるべきかは即断できない。

一方《口説》ではHHLL型(105語)とHLLL型(110語)とが拮抗しており、その間に重なりがないことも注意をひく。重なりがない、すなわち同じ名乗が二つの型をとることがないということは、おそらく平曲の伝承が尊重されてきたことによるものであろう。その点《白声》が伝承というよりはむしろ近世中期の京都アクセントを反映しているのと対照的である。

2.2.3 すでに2.1.1に述べたように、《白声》と《口説》との対応をみると、《白声》HHLL型：《口説》HLLL型という様子が看取される。この対応を明確にみせる名乗は「景時、清房、貞任、実平、重房、高家、高直、忠親、忠信、忠度、為久、親能、嗣信、経遠、経房、信成、信基、将門」の18語、「重能(成能)、種直、時忠、信隆」の4語は《白声》HHLL型/HLLL型：《口説》HLLL型、「仲頼」は《白声》だけにHHLL・HLLL両型であられる。「実基」だけは《白声》HHLL型/HLLL型：《口説》HHLL型となって例外であるが、2.1.4に記したように《白声》のHLLL型はHHLL型に訂正されてしかるべきものであろう。《口説》のHHLL型を反映する譜記は正節系諸譜本をみても誤記とは考えられない⁶⁾。

実基は(上コ×××) 6下嗣信8-2口説〔早尾京A(同)、芸(×コ×××)〕

3. 『正節』所載の名乗アクセントとアクセント構成

3.1 秋永一枝(1980:335)は古今和歌集声点本によって平安・鎌倉時代の様相を次の4項目にまとめている(一部本稿の記述に合わせてアクセント表示を改変した)。

- (1) 後部成素がHL型(下降型)のものは、そのアクセントを生かして□□HL型になることが多い。この場合、前部成素が高起式ならばHHHL、低起式ならばLLHLとなる。
- (2) 後部成素がHH型(高平型)のものは、そのアクセント型を生かして□□HH型になることが多い。この場合、前部成素が高起式ならばHHHH、低起式ならばLLHHとなる。
- (3) 後部成素がLF型・LH型(昇降型・上昇型)で前部成素が低起式のものは、後部成素のアクセントを生かしてLLL型・LLLH型になることが多い。
- (4) 後部成素がLL型(低平型)のものは、多数型□□HL型、後部平ら型のいずれかになることが多い。

『正節』は古今和歌集声点本とならぶ名乗のアクセントの宝庫であるが、そのアクセントはいわゆる「体系変化」を経たものである。したがって、古くは前部高起式ならばHHHL型、前部低起式ならばLLHL型が多数型であるとされるが、そのまま変化していれば、後者は近世ではHLLL型になっているはずで、前者も「型の統合」によってHHLL型と合流する場合がある。

一方このような規則的变化に従わないものもあるだろうことは想像に難くない。とくに多数型への類推はときどきにある程度はあったであろう。このような見通しのもとに、以下に京都における名乗のアクセントの変遷を検討する。

A段階		B段階		C段階		D段階		E段階
			▽		▽			
HHHH	=	HHHH	=	HHHH	=	HHHH	=	HHHH
HHHL	=	HHHL				↑		
(LLLL)	↯		↘			↓		↑
(HHLL)	=	HHLL	=	HHLL	=	HHLL		↕
LLLF	↯						↘	↓
LLLH	↯			↑	↯			
LLHL	⇒	HLLL	=	HLLL				HLLL
LLHH	↯							

3.2 そこでいま名乗のアクセントについての史的变化に、上図のような仮説を提出する。古くは、秋永が明らかにした A 段階で、多数型である HHHL 型と LLHL 型とを中心に HHHH 型などがあった。そこにいわゆる「体系変化」が起こって B 段階になる。続いて HHHL 型は HHLL 型との間に「型の統合」を起こして HHLL 型の方に接せられ、その HHLL 型が多数型として勢力をもつようになる。古く前部成素低起式のものがおさまる HLLL 型などからも、その一部は HHLL 型に類推して、自らのアクセント型を変えるものがあらわれたらうか。その結果、C 段階が成立する。《口説》は B 段階から C 段階への変化過程を反映しているのではないか。D 段階は、HLLL 型の語が HHLL 型（多数型）へと類推し徐々に数を減らして、HHLL 型の優勢が決定的なものとなった状況をいう。最後の E 段階は現代の様相をあらわしたもので、その所属する名乗の一つひとつを検討しても、すでに古く高起式か低起式かなどという伝統性は保たれていない状態である。名乗のアクセントの変遷はこのようなものだったのではないか。こう考えると、《白声・口説》の譜記から推定されるアクセントを古代と現代のアクセントの間に、適切に位置付けることができる。《白声》の様相は、さきにも述べたように C 段階から D 段階への過程なのか、D 段階から E 段階への過程なのか、数のうえから判断することはできない。しかし、そのアクセント構成を調べるとおよその推定は可能になる⁶⁾。

3.3 そこで、それぞれの型に属する語がアクセント上どのような構成になっているのかを検討することによって、この仮説を検証してみよう。その際よりどころとなるのが、秋永のいう四つの傾向である。

3.3.1 はじめに、HHHL 型に属する語は、秋永の傾向 (1) によると後部成素が HL 型で前

部成素が高起式であることが多く、また傾向(4)から前部成素高起式で後部成素LL型の場合にもあらわれるという。いまこの観点から《口説》にHHHL型であらわれる7語を検証してみると、1語を除いて傾向(1)で説明できるものばかりであった。すなわち、さきに示した構成成素のアクセント型によってみると「惟盛(HH+HL)、知教(HH+HL)、知盛(HH+HL)、教盛(HL+HL)、宗盛(HH+HL)、頼盛(HL+HL)」の6語は傾向(1)に合致するが、ただ一つ「惟義(HH+LF)」だけは例外となる。

ちなみにHHHL型の語には平氏に多い「盛」という系字が目立つが、前部高起式で後部成素が「盛(HL)」の名乗は『正節』に9語あらわれ、そのうち5語は《口説》でHHHL型、《白声》でHLLL型という上述の「惟盛、知盛、教盛、宗盛、頼盛」であるが、ほかは「敦盛、資盛、通盛、師盛」であって両曲節いずれかでHLLL型をとる。前部低起式の場合も「有盛、兼盛、清盛、貞盛、実盛、重盛、忠盛、経盛、長盛、業盛、信盛、光盛、義盛」の全13語はいずれも両曲節いずれかでHLLL型をとる。これらは傾向(1)によるならば一旦はLLHL>HLLLと変化したであろうが、さらに多数型への類推によってHLLL型におさまったものと思われる⁷⁾。

3.3.2 HHHH型として数えた語には問題があることすでに述べたところ(2.1.2)であるが、古くは傾向(2)から前部成素高起式で後部成素がHH型の場合、また傾向(4)から前部成素高起式で後部成素がLL型の場合にもあらわれやすい型であると考えられる。いま『正節』《白声・口説》いずれかに確例ある14語「公朝、季貞、季重、為義、憲貞、宗実、宗通、師高、行隆、行綱、頼兼、頼綱、頼朝、頼政」を取り上げると、前部高起式であることには例外なく、後部成素HH型(朝、通)あるいはLL型(貞、重、実、高・隆、綱、政)が大部分を占めて、例外となるのは「為義(HL+LF)、頼兼(HL+LF)」だけである。

3.3.3 つぎに《白声》でHLLL型をとる34語について検討する。これらがLLHL>HLLLの変化によるものなのか、それとも新たにHLLL型から変化したものなのかについて考えてみたい。もしこれら34語が前者の変化の結果としてあるならば、傾向(1)および(4)から前部成素低起式で後部成素がHL型またはLL型の場合に多く、また傾向(2)から前部成素低起式で後部成素HH型の場合にLLHH>HLLLという変化が想定され、この条件にあてはまるものが多く含まれているであろうと推定される。また一方、新しい「型の統合」によってできたHLLL型ならば、さまざまな構成のものが一旦はHLLL型にまとまったのちの変化ということになるから、それらのアクセント構成はまちまちなものになるであろう。

そこで問題の34語を調べると、まず前部成素高起式のものが「季仲(HH+LH)、為房(HL+LL)」の2語あるが、ほかの32語はすべて、古く前部成素低起式であることが明らかになる。前部高起式の2語2例がなぜあらわれるのか疑問であるが、これら両例が「11上願立5-1・5-2」に連続してあらわれることとなんらかの関係があるのかもしれない⁸⁾。

残る32語は前部成素低起式であるが、そのうち後部成素HL型またはLL型、あるいはHH型

のものはすべて23語で全体の7割以上にのぼる。「信連」も後部HX型と推定したのであるからここに含めてよいであろう。「兼平、重衡」の後部成素のアクセントは古く不明なので除外するとすれば、8割の語にLLHL>HLLLの変化を想定できることになる。

後部成素HH型：景季、兼遠、武里、仲国／後部成素HL型：忠文、仲頼、信頼、広嗣、元方／後部成素LL型：家貞、定房、実基、隆房、種直、時実、時忠、成忠、成親、信隆、基房、義定（義貞）、義久、義基

例外は、後部成素LF型の「貞能、重兼、重能（成能）、時晴、信俊、義兼」の6語である。このうち「貞能、重兼、重能（成能）、信俊」は《口説》にあらわれるHLLL型に引かれた可能性も考えられる。「時晴」は前部成素の変化型HLに引かれた可能性もあろうか。しかし、やや強引な感じはするが、これらは同じ前部成素低起式のもので、秋永の傾向（3）によれば古くLLLF型であった可能性が高いものである。この段階で多数型LLHL型に類推していたとすればどうであろうか。ことさら後部成素LF型と推定される6語を例外扱いしなくてもすむわけである。古く前部成素低起式の名乗の中には多数型LLHL型に類推するものもあり、中世後期以降はHLLL型に変化していた可能性も考えられよう⁽⁹⁾。

このことは、《白声》のHLLL型はほとんどが古く前部成素低起式のもので、《白声》に反映した名乗のアクセントは、C段階からD段階への過渡期のものであるという推定を支持する。こののち、これらの名乗は多数型HHLL型に合同し、さらに「型の統合」によって現代のHLLL型へと姿を変えるが、その場合のHLLL型は前部成素高起式のものも含む⁽¹⁰⁾ので、それとは性質の異なるものであること、以上の考察からあきらかであろう。

3.3.4 それでは《口説》のHLLL型110語はどうであろうか。《口説》の譜記に反映したアクセントは、《白声》のそれが江戸中期における京都アクセントと考えられるのに対して、一時代前のものが伝承されたと考えられる。とすれば、前項の考察から《白声》のHLLL型所属の名乗が古く前部成素低起式で、伝統的な流れを汲むものであることが言えるのであるから、《口説》のそれも同様なものであると予想される。

実際は《口説》のHLLL型110語のうち前部成素高起式のものはずかに9語で1割にも満たない数であった。全体としては、考察の対象とした303語において、前部成素高起式の名乗は100語、同じく低起式は203語であるから、この数値はいかにも少ない。このことは《口説》のHLLL型もまた伝統的な流れを汲むものであることを明示している。例外となる9語とは、「顕季、顕頼、為員、為久、嗣信、秀遠、秀義、盛定、盛遠」であるが、これらにどのような事情があるのかいま明らかにはしえない⁽¹¹⁾。

3.3.5 HHLL型については《白声・口説》ともに古く前部成素高起式のものと同低起式のものとの混在している。なぜHLLL型が古く前部成素低起式の名乗にはほぼ統一されている⁽¹²⁾のに、HHLL型は両者が含まれているのであろうか。

それは、『正節』の HLLL 型は伝統的な低起式アクセント LLHL 型や LLHH 型から規則的に変化したものが中心であり（その点で現代京都の HLLL 型の名乗とは性質が違う）、一方 HHLL 型は多数型として、それぞれの前部成素の式などには関わりなく、この種の名乗を自らのアクセント型に引き付けたからである。換言すれば《白声・口説》の HHLL 型は他の型からの類推変化を受け入れた多数型である。HLLL 型は《口説》の時代から《白声》の時代へと進むうちに、多数型である HHLL 型へと類推するものを手放しつつも、なお《白声》においてもその型を保つもの（34語）を残していたということになる。

しかし、その後現代にいたるまでに、こんどは HHLL 型の方が「型の統合」によって、そのまま HLLL 型に転換するという事態になる。この結果成立したのが現代京都の HLLL 型であるから、そのアクセント構成が多様であるのも当然であろう。対して、近世《白声・口説》に施譜されたところから推定される HLLL 型の名乗は古く前部成素低起式という点において、現代のそれとは異質のものである。

かつて《口説》HLLL 型：《白声》HHLL 型という対立のある名乗があることを、筆者はアクセント変化として解釈しづらいことから、施譜時の類推を考えた。しかし《口説》の HLLL 型は、古く前部成素低起式のもので LLHL 型などからの変化型と考えられること、すでに述べたところである。これが先述の B～C 段階において多数型 HHLL 型に類推して型を転換しはじめた。その様相を端的に反映しているのがこの対立であると考えられよう。

ところで《口説》の HHLL 型と《白声》の HHLL 型とは同質のものなのだろうか。もし《口説》が B 段階から C 段階に至る過程を反映しているならば、高起式の HHHL 型・HHLL 型はもちろん、LLLH 型や LLLF 型が合流して成立していたに相違なく、一方《白声》の HHLL 型が C 段階から D 段階に至る過程を反映しているとすれば、さらに LLHL 型や LLHH 型からできた HLLL 型から転換したものも内包しているに相違ない。

そこでまず《口説》の HHLL 型105語をアクセント構成別に整理すると、前部成素高起式のもの38語、同じく低起式のもの67語であり、前部低起式に続く後部成素は HH 型 8 語、HL 型19語、LH・LF 型15語、LL 型25語となった。秋永の傾向からすると、むしろ (LLHL・LLHH>) HLLL 型になっていよさそうなものが多いことに気付く。また《白声》の HHLL 型127語についてもほぼ同様で、前部成素高起式のもの52語、同じく低起式のもの75語であり、前部低起式に続く後部成素は HH 型 7 語、HL 型15語、LF 型15、LL 型35語（ほかに型不明 3 語）となる。これらの数値からすると、《口説》の HHLL 型も《白声》の HHLL 型も特別取り立てていほどの差はなく、両者ともに (LLHL・LLHH>) HLLL 型から多数型への類推によって型を取り換えてきた HHLL 型をも含んでいる可能性が高い。《白声》ならばともかく《口説》にそのような傾向がみられるということは、《口説》を単に B 段階から C 段階への過渡期に位置付けるとはいえ、それは HHHL 型を残すという点では B 段階に近く、HHLL 型が HLLL 型から変化してき

たものを含むという点ではC段階的であるといえよう。

おわりに

『正節』《白声・口説》のHLLL型の名乗が、古く前部成素低起式であったという伝統性を維持し続けているのに対して、HHLL型の方は前部成素の式とは関わりないことを、どのように解釈するか。また、現代京都に聞かれるHLLL型が古い時代の前部成素の式とは無関係であることと、近世における《白声・口説》のHLLL型との不連続性をどのように考えるかが本稿の中心的な問題であった。これまでは《白声》HHLL型：《口説》HLLL型という対立に気をとられて、現代京都のHLLL型にすっきりと繋がらない点をどう説明するかに目を向けてきたが、その底には名乗のアクセントの変遷図に示した流れがあり、この対立はそのなかの一面を見ていただけだったと考えられる。変遷図のおおよそは秋永（1980:338）によったが、近世から現代にかけてのところをやや詳しく記した。また奥村（1993）などに言われる「基本型」という考えが、近世と現代との不連続を解く鍵になったように思う。

動詞や形容詞アクセントにも見られるように、近世までのアクセントは伝統性の色濃いものである。たとえ「体系変化」を経たとはいえ、変化型を比較的良好に留めて、現代のように「基本型」へと変化することは少なかったようだ。そのことは名乗のアクセントの変遷の過程でも一層明らかになったように思われる。《口説》から《白声》へという近世の流れは、HLLL型が減少しHHLL型が比重を増す方向にあった。対して、その後の現代への動きは、HHLL型がHLLL型へと統合する方向に向かった。その流れの転換点を明示的にあらわしたかったので、本稿ではD段階を設定した。

《白声》と《口説》との違いは歴然としている。《口説》にはHHHL型があり《白声》ではそれらがHHLL型になっているというのは、時間的な前後関係とみてよいであろう。また《口説》から《白声》へと移行する間にHLLL型の占める割合が減っていくこともはっきりと看取できる動きである。奥村（1986など）はこれを「語頭下降調回避現象」として捉えるが、ここでは多数型への類推と考えた。しかし、その類推が働くのはC段階以降のことと推定する。古く多数型であったLLHL型から直接変化したHLLL型も、その当初は多数型で安定していたに相違ない。ところがC段階になって一方の多数型HHHL型がHHLL型と合流するに及んで、俄然HHLL型の力が増したのであろう。そのような状況のもとでHLLL型はしだいに数を減らしたものと推定される。それが《口説》と《白声》の数値の違いにあらわれていると解釈する。

以上が本稿の要点である。これらを総合して、「体系変化」以降における名乗のアクセントの変遷を祖述してみたしだいである。

注

- (1) 秋永一枝 (1980:337) によれば、京都中心部の高年層で従来 HLLL 型とされてきたものには HHLL 型と認められるものもあるという。中井幸比古 (2002) のデータにもそれらしい様子はみられるが、明治・大正時代に生育した人からは余り多くは聞かれないようで、昭和生まれ以降になると増えてくるらしい。このような高年層に聞かれる HHLL 型はおそらく、のちに述べる D 段階のそれが部分的に残ったものであろう。若年層のは共通語の影響か。
- (2) 『観智院本類聚名義抄』(天理図書館善本叢書34)「茂」の字に「モツ<平上>」の訓がある(僧上18オ2)。
- (3) その他の1語1例は実際の人名ではなく、「親家」という武士の名を義経が茶化して言ったものである。「何=家にても(××上上×××) 15下勝浦8-4素声」もちろんこれは考察の対象から外す。
- (4) 上野和昭 (2004) に詳述したので参照されたい。
- (5) 芸大本は、はじめの譜が脱落したものであろう。『演博(豊川)本』の原譜には(平××××)とある。ただし曲節は「口説白声」。かつて筆者は「逆の変化を示唆するもの」(上野1988:16-17)としてこの例を扱ったが、なにもそのように解釈する必要はなかった。また旧稿に掲げた「忠信」は誤り。
- (6) この変遷図は、秋永(1980:338)の図にD段階を加えて「現京都」の部分をついに二つに分け、さらに《白声・口説》の譜記から知られるアクセントを変遷図の中に位置づけたものである。
- (7) 秋永(1980:337)は「盛」を、前部成素が低起式の場合にはLLLH型を形成する後部成素とするが、そうであればこのような説明は不要になる。ただし、その場合は傾向(1)の例外としなくてはならない。
- (8) 『演博(豊川)本』の原譜(線条譜)は「為房(平××××)」「季仲の卿(××××上平××)」とあって、「季仲」は別型であったかと思わせる譜記を付けている。「為房」はあるいは前部成素HLに引かれたものか。
- (9) 秋永(1980:334)によれば、後部成素LF型のものには必ずしも傾向(3)によらずに、多数型LLHL型になるものもあったらしい(《□□上平》をつくるものとして掲げられたLF型の構成成素)。
- (10) 中井幸比古(2002)に採録された4拍(2拍+2拍)の名乗について調べると、検討の対象となる名乗は約350語、そのうち前部成素が高起式のもの約20%であった。また京都生育の明治・大正生まれ(採録語数の少ない2人を除いて)9人について集計してみると、HHHH型とHLLL型それぞれの前部成素高起式の割合もやはり20%前後であった。これは現代京都の名乗に聞かれるHHHH型とHLLL型には、古い時代の前部成素の式は関与していないということを意味する。
- (11) このうち「盛定」の例は「盛定(コ×××) 9上文流2-2口説〔尾早(同)、京A「もりさだ」の「も」を朱で消して墨「な」と訂正、朱「盛定板」〕」である。あるいは「成定」のアクセントが紛れ込んだかとも疑われる。
- (12) すでに秋永(1980:338)に、『正節』でHLLL型のは、鎌倉時代ほとんどLLHL型であるという指摘がある。

参考文献

- 秋永一枝 (1980) 『古今和歌集声点本の研究』研究篇上 校倉書房
- 秋永一枝・上野和昭・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木 豊 (1997・1998) 『日本語アクセント史総合資料』索引篇・研究篇 東京堂出版
- 榎垣 実 (1946) 『京言葉』京都叢書 5 高桐書院
- 奥村三雄 (1986) 「アクセントの変化—アクセント型式と所属語彙の問題—」『論集日本語研究』(二) 歴史編 明治書院
- 奥村三雄 (1990) 『方言国語史研究』 東京堂出版
- 奥村三雄 (1993) 「平曲のこことばと旋律—音楽性から語音形へ—」『平家琵琶—語りと音楽—』ひつじ書房
- 坂本清恵・秋永一枝・上野和昭・佐藤栄作・鈴木 豊 (1998) 『「早稲田語類」「金田一語類」対照資料』アクセント史資料索引13 アクセント史資料研究会
- 中井幸比古 (2001) 『京都市方言アクセント小辞典 付.京都市中川・滋賀県野洲方言アクセント』方言アクセント小辞典 (5) 平成 9-12年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 研究成果報告書
- 中井幸比古 (2002) 『京阪系アクセント辞典』データ CD-ROM 勉誠出版
- 中村萬里 (1986) 「平曲譜本にみえる「名」のアクセント—白声・口説を中心に—」筑紫国語学談話会発表資料
- 上野和昭 (1988) 「平曲譜本にみえる漢字二字四拍の「名」のアクセントについて」『徳島大学総合科学部紀要』第1巻 (人文・芸術研究篇)
- 上野和昭 (1995) 「統合と類推—中世後期以降の京都における形容詞アクセント体系についての一考察—」『早稲田日本語研究』第3号
- 上野和昭 (2004) 『「平家正節」に見られる、いわゆる「特殊低起式表記」について』『国語国文』第73巻第10号